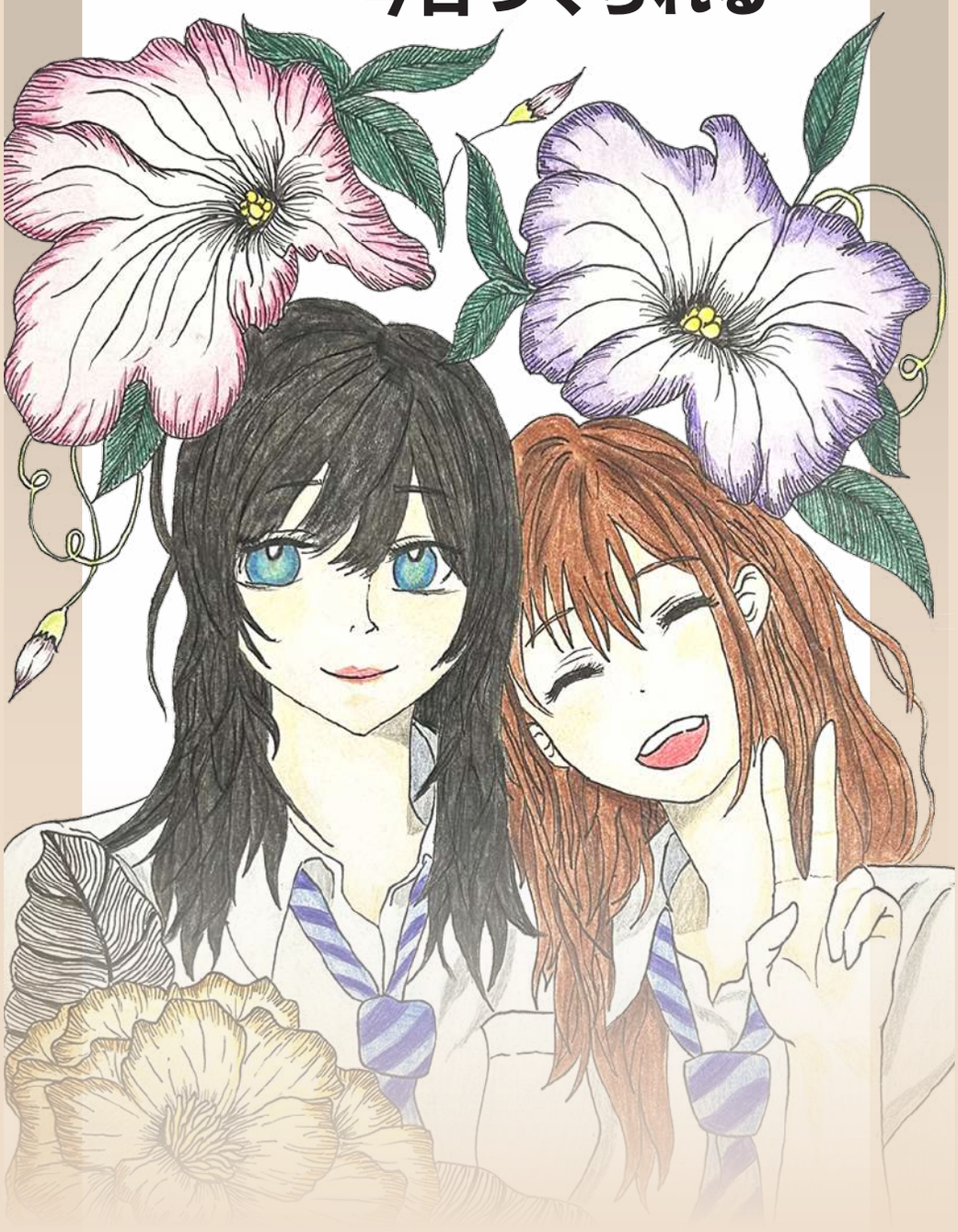
2024年度調査報告書

青少年活動とユースワーク

～明日の指導者は今日つくられる～



兵庫県青少年団体連絡協議会

2024年度（公財）兵庫県青少年本部委託事業

illustrator / Kaito

兵庫県青少年団体連絡協議会 調査報告書

青少年活動とユースワーク

～明日の指導者は今日つくられる～

目 次

はじめに …… 2

巻頭インタビュー …… 3－4

「若者を育むとは」
大本 晋也さん（青山学院大学コミュニティ人間科学部特任教授）

ユースワークとは …… 5－6

「これからの青少年に必要な活動とは～青少年活動とユースワーク～」
青山 鉄兵さん（文教大学人間科学部准教授）

座談会 …… 7－10

「これからの青少年活動とユースワーク」
〈コーディネーター〉青山 鉄兵さん（文教大学人間科学部准教授）
〈ゲスト〉中山 迅一さん（認定NPO法人 まなびと 理事長）
多田 実乗さん（認定NPO法人 兵庫子ども支援団体 代表理事）
赤木 友香さん（子どもの遊び場を考える会 赤とんぼ 代表）
多田 理紗さん（認定NPO法人 Learning for All 子ども支援事業部 尼崎エリア統括責任者）

視察＆インタビュー …… 11－13

「京都市ユースサービス協会の実践～ユースワークの考え方をもとに～」
公益財団法人 京都市ユースサービス協会

インタビューを終えて …… 14－16

「一人一人」を大切に　萩本 義郎（一般社団法人 いえしま自然体験協会　副会長）

ノンフォーマル教育と青少年活動　速水 順一郎（兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問）

「自分らしさ」を大切に　太田 はるよ（一般社団法人 兵庫県子ども会連合会 副理事長）

5つの提言 …… 17

ひょうご青少年憲章 …… 18

表紙絵「淡い春」Kaito

2人の高校生をペチュニアとダリアの花で飾りました。
ペチュニアには「安心」、黄色のダリアには「優美」という花言葉があります。安心できる若者の居場所づくりと、そこに集う子どもや大人の優美さにつながってほしいという思いを込めたイラストです。

Kaito illustrator

幼少期に虐待を受け、児童養護施設で育つ。7歳で里親に引き取られるも再度虐待にあい、児童養護施設に戻る。孤独を感じる中、絵を描くことや絵本を読むことに救われ、そこに居場所を見出す。色盲という困難を持ちながら、現在は誰かのために絵を描くことを生業にすることを決意しイラストレーターとして活動中。

@kaito_design_36　@矢口海人

はじめに

我が家の長男は小学1年生の頃から、地元のそろばん教室に通っています。そのまま辞めることなく小学 6 年間続け、中学生になっても通い続けています。週 3 回通い続けた彼は教室の中でも、上級者の部類に入っていました。
中学 2 年生のある日、そろばん教室から私の携帯に電話が入りました。電話に出ると長男の声でした。「お父さん、今日は遅くなるわ。理由は帰ったら話すから」とだけ言って一方的に切りました。
その後、いつもより 2 時間ほど遅く帰ってきた彼は、私にこう話してくれました。「そろばんの先生がな、途中で体調が悪くなってきたねん。だから僕が途中から丸つけとかいろいろと手伝っててん」とてもイキイキした顔で話してくれます。しかも、自分から手伝うと言い出したようです。
翌日は土曜日でした。朝、いつもより早く起きてきた長男は、朝食を早々にとると、また急いで出かけようとしています。「どこに行くの?」と私が尋ねると、「今日もそろばん教室に行ってくる。午前の教室があるから。先生もみんなも僕を頼りにしてくれているねん」
いつもは朝が苦手な長男が早起きして自分から動いています。自分が必要とされる場所を見つけた。ありたい自分を見つけた。この長男の姿を見て、居場所とはこういうことかと私が学んだ瞬間でした。

私たちが行う青少年活動は、様々な体験活動を通じて青少年の居場所を創出する活動とも言えますが、会員や参加者の数が減少している団体も少なくありません。次世代の指導者が不足している団体もあります。社会に必要とされる活動のはずなのに、なぜなのでしょうか。
一方で、ユースセンターという施設が全国各地で生まれ、青少年の居場所づくりが盛んに行われています。ユースセンターでは青少年と関わるユースワーカーの存在やそのあり方が重要とされています。
VUCA の時代だからこそ必要とされる青少年の活動、全国に広がるユースワークという活動の視点から見直そうと、今回の調査研究活動を行いました。この報告書が様々な青少年活動団体のこれからを考える参考になりましたら幸いです。

兵庫県青少年団体連絡協議会
調査研究委員会　委員長
山崎　清治

青山学院大学コミュニティ人間科学部特任教授

大本 晋也さん

1960 年神戸生まれの明石育ち
1983 年兵庫県立淡路盲学校教員を皮切りに、18 年間高校教員として勤務
2001 年から 3 年間、国立淡路青年の家専門職員として勤務
2004 年から 10 年間兵庫県教育委員会で、指導主事～社会教育課係長～教育事務所副所長～社会教育課副課長として勤務
2014 年 4 月から国立淡路青少年交流の家所長として 8 年間勤務、そのうち 2 年間は国立青少年振興機構理事 (事業担当) を兼務
2022 年から南あわじ市教育委員会学校教育課で新施設開設準備を担当
2023 年に南あわじ市学ぶ楽しさ支援センター所長に就任
2024 年から青山学院大学コミュニティ人間科学部に勤務、現在に至る

聞き手 太田 はるよ
兵庫県青少年団体連絡協議会 運営委員
（一般社団法人 兵庫県子ども会連合会 副理事長）

「若者を育むとは」

Q 大本さんが青少年育成に関わるようになったきっかけを教えてください

1983年から 18 年間、高校教員として勤務していた私が「生涯教育」に出会ったのは、1991 年のことです。旧淡路町のステージオペレーター講座の舞台照明講師をしていた際に、参加者のモチベーションが高く、嬉々として学ぶ人々に出会ったのが始まりでした。
その頃、高校で生徒と関わる中で、「正解主義・成功主義・成果主義」の教育や、大学受験のための教育に違和感を抱いていました。「学校という組織とは別に、自由な学び場がある」と気付き、本当に自分がしたいことを自由に学べる、生涯教育や社会教育の魅力にどんどん引き込まれていきました。
1994 年に岡山大学で社会教育主事の資格を取得し、2001 年、国立淡路青年の家専門職員としての入職を皮切りに教育行政の道に入りました。兵庫県教育委員会播磨東教育事務所副所長、社会教育副課長等を歴任、国立青少年教育振興機構理事兼国立淡路青少年交流の家所長等を経て、2022 年より南あわじ市教育委員会に勤務し、初代所長として「学ぶ楽しさ支援センター」の立ち上げに尽力しました。
2024 年からは、青山学院大学コミュニティ人間科学部で青少年教育、地域探究実習等を教えています。

Q 若者たちと接していて、どんなことを感じていますか？

コロナの影響も大きく受けている今の若者たちは、ネットや SNS で「わかったつもり」「繋がったつもり」になっていることが多いのではないでしょうか。それでは深い学びやつながりが得られるとは言い難いと思います。若者たちには、もっと主体的に学んでほしいし、「学ぶって楽しい」ということを知ってほしいと思います。それに加えて、「なりたい自分になる」ということが一番の幸せであり、自分を生きる、自分を生かす、これこそまさに「使命（= 命の使い方）」だということを、活動を通して多くの若者たちに伝えています。
若者と関わるときに大切にしているのは、「学びの主体性」と「当事者意識」。本来、子どもたちは好奇心旺盛であるはずなのに、大人の喜ぶ答えに無難にまとめようとしがちで、「これでいい？これであってる？」とすぐに聞く姿を目にすることがあります。私が危機感を抱いている、「正解主義・成功主義・成果主義」

の教育の影響ではないかと考えています。「失敗することに学びと気づきがあり、人の生き方に 100点満点もなければ0 点もない。自由に考え、自分ならこうするという意見を持ってほしい」と、勤務校の学生たちにも日頃から伝えています。

Q これまでの活動で印象に残っていることを教えてください

「あの時の感動は忘れられない」と今でも鮮明に思い出すのが、県立淡路盲学校に 着任した翌年の 1 月、「劇団ともしび会」の一員として関わった児童劇です。
旧南淡町の沼島で開催した公演の劇団参加者は 20 代が多く、リーダーは30代、代表・副代表は50代。会場の沼島小・中学校体育館に特殊舞台を作り、当日は地元のバレエ団の子どもたちも参加し、「誰一人欠けても完成しなかった舞台」を全員でつくりあげました。
皆が当事者意識を持って同じところを目指す舞台芸術は、「自己有用感」が育ちます。役者もスタッフも、関わる全ての人がいないと成立しない、発生したトラブルをいかにリカバーして全員で作り上げるかという、プロセスが大切です。それはまさにチームビルディングで、「それぞれが得意なところで輝く」ということは、どんな組織でも仕事でも大切であると考えています。

Q 若者と関わる時に大切にしていることはなんですか？

教育の世界に入って 40 年、実務的に社会教育の世界に入って24 年目。「同じやるならこだわって」「同じやるなら楽しんで」というのが私のモットーです。アドレナリンを出して必死になりながら皆で一つの目標に向かっていき、背伸びしないと届かないようなギリギリの目標を達成した時の達成感が最高に楽しいんです。それを自分の仕事で感じられたら最高ですよね。学生にも、そう伝えています。
私が高校の教員時代から意識していたのは、クラスの雰囲気を作るのは生徒たちであるということです。一人一人が主人公であり、役割分担をしながら主体的に参加し、お互いを称賛し合えるのが最高の組織だと考えています。

国立淡路青少年交流の家所長時に、コロナ禍で行った日帰りの自然学校「自然学校緊急応援事業」も心に残っています。校内での一日の教育プログラムを考えるプロセスで職員が一致団結し、「こんなに楽しい事業はない」と言ってくれたのがとても嬉しかったのを覚えています。コロナという逆境がチャンスになり、職員が一つのチームとなったことで、それが後に良い影響を与えることになりました。そして何より、自分たちで決めたことだからこそ、職員一人ひとりが主体的に関わって、コミットしていたんだと思います。
任せることで、責任を持って主体的に関わってもらうという考えは、教員当時のクラス経営の視点からも繋がっています。子どもたちの体験活動においても、コミットする姿勢が子どもたちの主体性を育てるのです。いつも一番大事にしていることは、子どもの限界を大人が決めてしまうのではなく、若い人の思いを実現すること。「若者を育む」とは、「共育（きょういく）」（共に育つこと）であると思うんです。若者と一緒になって、「こだわり」と「楽しさ」を大切に活動していたら、いつの間にか私の所長室は、ワークショップルームのようになっていましたね。（笑）

Q 最後に日本の若者たちにエールをお願いします。

若い人にぜひ大切にしてもらいたいのは、「自分を生きる、自分を生かす」ということです。いやいや取り組むのではなく、自分がしたいことのために努力するということにこだわってほしい。人は一人では生きられません。自分から動いて、社会に対してコミットしてください。

解説

『青少年活動とユースワーク』

講師 文教大学人間科学部准教授
青山 鉄兵さん

・専門分野：社会教育、青少年教育、ユースワーク
・主な活動：文部科学省生涯学習調査官
国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター客員研究員
東京 YMCA 評議員、東京 YMCA 長期キャンプ「野尻学荘」副荘長
こども家庭審議会こどもの居場所部会委員
中央教育審議会生涯学習分科会社会教育の在り方に関する特別部会委員

子ども・若者の「体験」「居場所」への社会的関心の高まり

●意図的な「体験」や「居場所」の提供と矛盾

「家庭」「学校」「地域」の様子がそれぞれ変容してきた結果、昨今では「体験」や「居場所」の必要性が盛んに語られるようになりました。家庭では、親の負担が増え、教育格差や放課後支援ニーズが高まってきています。学校では、学校教育の肥大化とさまざまな教育問題を抱えています。地域では、コミュニティが弱体化し、居場所になりうる場が減少してきています。これらのことから、体験や遊びの機会が減ってきていると言われています。そんな中、「体験」はお金で買うものになってきました。昔は自然にできていた体験も、わざわざ意図的に「させる体験」に変化してきています。体験が「与えてもらうもの」になった結果、さらなる体験格差を生んでいる現状があります。

1980 年代から、不登校への社会的関心の高まりとともに注目され始めた「居場所」。90 年代になると、居場所はみんなにとって大事なことなのではないかと考えられるようになりました。2000 年代に入ると、政策として「居場所づくり」が推進されるようになります。本来、居場所というのは空気みたいなもので、心地よい居場所があるときにはそれほど意識されるものではありません。しかし、居場所がないときほど、ものすごく意識されるものです。そして、なくなった途端に息苦しくなるものです。居場所はその人にしかわからないもので、あやふやなものなのです。

●思春期以降の「生きづらさ」とどう関わるか

「生きづらさ」は、2000 年前後の就職氷河期といわれた時代、若者の就労や自立に関連して、注目されるようになりました。挑戦や失敗をしづらい時代になり、若者を緩やかに支えてくれる場所が学校以外にない状況に。若者が弱者になりやすく、子どもから大人への移行期をサポートするニーズが多様化しました。SNS の普及により、そのコミュニティの中で同調圧力が高まることも、ときに「生きづらさ」につながってきました。

●子ども・若者の育成や支援をめぐる状況

近年、青少年教育施設の運営基盤の弱体化や、子どもの貧困や教育格差の問題が出てきています。学校内では比較的みんな同じ経験が保証されていますが、学校外で格差が広がっているのが現状です。社会教育や地域で活動している団体が、格差を小さくする可能性もあれば、一方で、格差を大きくする可能性もあります。例えば、子育て講演会には、意識の高い親が参加します。本当に必要な人に、必要な機会を届けることが重要だと思います。親が「うちの子だけはさせなきゃ」という思いで体験活動を提供するのではなく、「みんなでみんなを育てる」という感覚が必要だと思っています。

また、支援の方法には、「ユニバーサルアプローチ」と「ターゲットアプローチ」があります。「ユニバーサルアプローチ」は、みんなに開かれた場所・支援で、例えば公民館や児童館等によるアプローチです。一方で「ターゲットアプローチ」は、「障がいのある子のための」「被虐待児のための」「外国にルーツのある子のための」等、特定のニーズに特化したアプローチです。困難を抱えているからといって必ずしもターゲットアプローチが有効なわけではなく、両方のアプローチが大切です。ユニバーサルアプローチの中に、多様なターゲットアプローチを含んでいけるかということが鍵になってくると思います。

●近年の課題となっていること

子ども・若者育成支援推進法（2009年）、こども基本法施行・子ども家庭庁発足（2023年４月）等、国レベルで領域横断的な子ども・若者支援の推進が行われています。思春期以降の子ども･若者への関わり、格差の是正、教育や成果とどう付き合うか、「教育」や「支援」との付き合い方が、今後の課題であると感じています。

ユースワークという発想

●「ユースワーク」の見取り図

ユースワークの枠組み

- 思春期以降の若者の
- 家庭・学校職場以外の場面における
- 余暇の時間を支える取り組み

※活動の内容は問わない
※多様な領域（教育、福祉等）と関わる
※さまざまな施設や団体
※ユニバーサルもターゲットも
※間接的な働きかけも
※ユースワークと名乗っていなくても

ユースワークのこだわり

- ユースのために、よりも、ユースとともに
  権利主体としてのユース
- 教育や支援が主たる目的ではない
  結果としてのフォーマルでない学びや成長
- ユースワーカーの存在
  有給でもボランティアでも
- 個人を変える、以上に、環境 / 社会を作る営み
  民主主義

●日本における「ユースワーク」の広がり

「ユースワーク」は、1960年代後半以降、イギリスのユースサービスに関する議論の中で登場し、1990 年以降に「中高生の居場所（ユースセンター）」に関する議論で、そして 2000 年以降のヨーロッパにおける若者政策に関する議論の中で取り上げられました。「ユースワーク」は時期や文脈によって、意味や範囲も異なり、近年は、使われる場面が拡大・多様化してきました。国や地域による、独自の文脈や歴史の違いも生じていると考えられます。

「できるようになること」と「ありのままでいられること」のあいだで

ユースワークにおいて大切なのは、「できる / できない」に関わらず、そのままの自分が受け入れられていると実感することです。同時に、活動を通じて何かができるようになっていくことも重要な意味を持ちます。「できるようになること」と「ありのままでいられること」。双方が両立することが、ユースワークにとって重要ではないでしょうか。

『これからの青少年活動とユースワーク』

〈コーディネーター〉青山 鉄兵さん（文教大学人間科学部准教授）

〈ゲスト〉中山 迅一さん（認定NPO法人まなびと 理事長）
多田 実乗さん（認定NPO法人兵庫子ども支援団体 代表理事）
赤木 友香さん（子どもの遊び場を考える会 赤とんぼ 代表）
多田 理紗さん（認定NPO法人 Learning for All 子ども支援事業部 尼崎エリア統括責任者）

中山 迅一さん

認定NPO法人 まなびと 理事長

- 神戸市中央区で地域の居場所づくり（子どもの居場所づくり、外国人の居場所づくり、多文化共生・地域コミュニティづくり）
- 若者に、やりたいことが見つかるまでの待ち時間を届けたい
- あなたはあなたでいいんだよ、と言ってもらう機会を地域でつくっていく

自分自身、大学に入った瞬間に行き先がわからなくなって人生に迷った経験があります。テストでいい点をとって偏差値の高い大学に行けば、内側にしんどいことがあったとしても、幸せな人生になると思ってやってきましたが、うまくいかず、大学時代を悶々と過ごしました。絶望して前に進めなくなり、引きこもる経験もしました。人生をネガティブに捉えていた時、気づけば 1ヶ月間、家の裏に穴を掘り続けていました。人からの評価を気にせず掘り続けていたその時、父親は何も言わずに「今日はどれくらい掘れたんや?」と聞いてきました。「自分は自分でいていいんや」とその時初めて思えました。求められるべきは「当たり前が当たり前であること」。

多田 実乗さん

認定NPO法人 兵庫子ども支援団体 代表理事

- 2013年に団体を設立し、2017年にNPO法人化 現在も代表として活動している
- 2018年～兵庫県内の小学校で勤務（教育公務員）

認定 NPO 法人兵庫子ども支援団体では、明石市・神戸市・兵庫県下で、学習支援、居場所づくり、情報発信、体験活動、生活支援（物品支援）、児童虐待防止等に取り組んでいます。ミッションは、子どもが笑って過ごせる地域の形成、ビジョンは、子どもたちが夢を諦めることのない社会をつくることです。子どもたちと「つながり」をつくることをキーワードに活動をしています。これから活動をよりよくしていくためには、子ども、地域、家庭（親）、行政、他団体、学校等とつながっていくことが大事だと思っています。

赤木 友香さん

子どもの遊び場を考える会 赤とんぼ
「プレーパーク赤とんぼ」代表

- 保育士の勉強をしていた学生時代、先輩に誘われたのがきっかけでプレーパークに
- 活動が楽しく、自分にとっても大切な場所となり、15 年ほど活動を続けている

プレーパークは、大人が決めたプログラムはなく、子どもたちがやりたいことを自分で見つけてチャレンジする場所です。子どもたちが、「五感の刺激」「健康な心と体」「自然との関わりや生命の尊重」「社会生活・他者との関わり」を自然の中で体験することがプレーパークの意義だと思っています。10 代～30 代の学生や社会人が、プレーリーダーとして、活動に携わっています。今後も、資金の確保、誰もが参加しやすい環境づくり、地域への活動の周知に取り組みながら、継続的な事業を行なっていきたいと考えています。

多田 理紗さん

認定NPO法人 Learning for All（ラーニングフォーオール）
子ども支援事業部エリアマネージャー（尼崎）

- 原動力は子どもの権利が尊重されない社会への憤り
- 地域で子どもの育ちと学びを保障する仕組みをつくりたい
- 応援者であり伴走者である

Learning for All は、「子どもたちの貧困」を本質的に解決するために、居場所づくり・学習支援・食事支援等の「地域協働型子ども包括支援」の実践、全国へのノウハウ提供、活動の普及・啓発等の事業に取り組んでいます。尼崎では、子どもと生活・食事をともにする居場所、ユースセンター「Hygge（ヒュッゲ）」、行政・民間の垣根を越えたネットワーク「おなかまプロジェクト」に取り組んでいます。

「子どもたちの貧困」は、経済的に困窮していることだけではありません。登校、虐待、自殺等にも繋がっていると考えます。経済的な基盤がないことを背景として、「つながり」「学びの環境」「育まれる環境」を喪失しやすいことが、自立を阻む大きな障壁となっています。Learning for All では、将来的に貧困になる可能性のある子どもたちにも、アプローチしていきたいと思っています。

みなさんの活動で大切にしていることを教えてください。

組織運営について

現在、職員が 13 人いて学童保育、放課後等デイサービス等、現場ごとに責任を持って運営してもらっています。月 1 回のミーティングを行い、一緒に事業を進めています。

支援において大切にしていること

「子どもが選ぶ」ということを大切にしています。同時に、自分で選ぶことが難しい子どもの成長をどう引き出していくかを考えるようにしています。隣にいる子が楽しんでいる様子を共有し、「混ぜ合う」「重ねていく」ということを意識しています。

運営資金について

子ども食堂は助成金をいただいていますが、それ以外の事業は、寄付金のみで運営をしています。

仕事との両立について

私自身が小学校でも働いているので、学校現場でのことを活かしながら活動しています。団体の組織の中でも、教員の視点を活かした役割を担っています。仕事量は、負担にならないように調節してもらっています。楽しく活動することができています。

支援者の支援について

支援者が支援を続けていくために大切なことが 3 つあると思います。まず 1 つ目に、「雇用の保障」がとても大事だと思っています。これは一 NPO 法人団体が頑張る世界観ではなく、社会の中で高めていくものだと思います。2 つ目は「スキルの向上」です。「自己覚知」というスキルがあります。子どもと自分自身は別の人間なんだと考えて支援を行っていくことが重要です。3つ目は、「頑張りあえる、応援しあえるコミュニティ」です。この 3 つが揃うと、支援者は支援を続けていけると思っています。

活動の実施場所について

まずは場所の交渉から始まります。もちろん断られる場合もあります。使用できることになれば、企画書の段階に進みます。都市部では、公園を利用してプレーパークをしているところもあります。自然を使ったプログラムは、田舎の方が見つけやすいですね。

運営資金について

助成金で活動をしています。「巨大落書き大会」は、助成金と企業からの寄付金で開催できました。プレーパークの利用は基本的に無料です。遊び場の中に、コインが転がる式の楽しい募金箱を設置し、利用者にも楽しく寄付をしてもらえるよう工夫をしています。

子ども・若者を支えていくためには、子ども・若者以外の世代についても考えていく必要があります。小学生や中高生だけでいるから居心地がいい場面もあれば、多世代の中に子どもが一緒にいるのがいい場面もあります。大人も子どもも含めて、「地域全体で繋がる」という目線で考えていることがあれば教えてください。

子どもの目線に立った時に、よりニーズに合った支援が提供される場所、誰でも立ち寄れる場所、支援者がいる場所、支援者がいない場所…いろいろな場所のグラデーションがあるのがいいなと思います。若者が地域の大人に支えられながら、「就労」や「学び」等に打ち込める地域にしたいと思っています。

「場所づくり」、「心の問題」について考えました。支援者も含めたその地域に住む一人ひとりが、心の中に余裕を持てているのか、「そのままの自分でいてもいい」と思えているか、自分自身だけでなく、そのことを隣の人に伝えているか。それができていればもはや地域全体が居場所になり、困っている人がいる時に、受け止め合える地域になると思います。そういう地域づくりにチャレンジしていきたいです。

事業を行い進めていく手前の段階にある、関係性、風土、土壌をどう作っていくのかを考えていきたいですね。

地域のどこにいても認めてもらえる居場所があるというのは、私も大事だと思います。団体がいくつかあって、子ども自身や地域の人が「行きたい」「ここだったら行けそう」という場所があればいいですよね。「おせっかいな人」という存在も大切かもしれません。子どもたちの登校を見守る等、自分に今できることをしていくのが、大きな意味での居場所になるかなと思います。

「支援者自身が居場所を感じられていないかもしれない」という声もありますね。

私にとっては、「プレーパーク」がホッとできる場所になっています。家や仕事とは別のコミュニティなので。ここでの人間関係は、私にとって気持ちを吐き出せる場所、コミュニティの一つです。携わっているスタッフともよく、居心地がいいという話をします。活動後のごはん会、おしゃべりの時間等、活動以外のほっとできる時間がみんなにとって居心地のいい時間なんです。誰でもふらっと立ち寄れる場所にすることで、地域の人にもこの輪が広がっていくのではないかと思っています。

活動を行う前後の時間も含めて、それ自体が一つのコミュニティになっているということですね。みなさん、ありがとうございました。

公益財団法人

京都市ユースサービス協会

1988 年に法人を設立し、青少年活動センターの運営を始めました。2001 年には京都市内の7つの青年の家（勤労青少年ホーム）が青少年活動センターに生まれ変わり、その後は、若者サポートステーション、子ども・若者総合相談窓口、社会的養護自立支援事業、校内居場所カフェ、ヤングケアラー事業等を受託して現在に至ります。京都市ユースサービス協会の対象者は、主に中学生～30 歳です。若者の自己成長を支える「ユースサービス」を理念とし、活動をしています

事業統括
竹久 輝顕さん

聞き手 萩本 義郎
兵庫県青少年団体連絡協議会 理事
一般社団法人いえしま自然体験協会 副会長

聞き手 速水 順一郎
兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問

京都市ユースサービス協会の実践
～ユースワークの考え方をもとに～

Q そもそも「若者」をどのような存在として捉えていますか？

若者は、「子ども」と「大人」の間の移行期にあると考えています。移行に伴って起こる課題に対しては、「社会に合わせていく」ということが求められますが、「社会の側を変えていく」ということも時には重要で、両面から関わっていくようにしています。常に重視するのは、若者の主体です。京都市ユースサービス協会では、「育成」という言葉をあえて使わず、「活動」「育ちの機会保障」と言い換えています。京都市ユースサービス協会の役割の一つは、機会の設定をするということであり、その機会の一つひとつを選ぶか選ばないかは若者自身の自由であると考えています。

Q 京都市ユースサービスが考える「ユースワーク」の定義について教えてください。

イギリスやヨーロッパでは定義づけられているものの、日本には明確な定義がなかった「ユースワーク」。2021年、立命館大学と京都市ユースサービス協会との共同研究において、「ユースワーク」を次のように定義づけました。

“ユースワークは、若者を子どもから大人の移行期にいるすべての人と捉え、若者が権利主体として自己選択と決定が保障される自由な活動の場を若者とともに形成し、若者及び若者と関わる大人やコミュニティ、社会システムに働きかける実践である。” また、ユースワーカー協議会がまとめた「若者に関わるときに大事にするもの」が以下の6項目です。

1、個々の若者の固有性を価値あるものとしてとらえる
2、信頼関係づくりから始める
3、若者の自己決定を尊重する
4、他者との関わりと、集団の中での学びのプロセスを大事なものとする
5、すべての若者への機会と場を保障できるようにする
6、若者が所属するコミュニティや社会全体の正規の一員として位置づけられる

（『ユースワークって何だろう!?』（2019）より）

Q 京都市ユースサービス協会の主な取り組みについて教えてください

～若者のための場づくりと多様な機会づくり～

1 過ごす・集まる・活動することができる **「場」**

2 ボランティア活動・交流プログラム等の参加ができる **「機会」**

3 「やりたい」を実現するためのサポートや、日常の雑談から相談まで気軽に話せる **「ユースワーカー」**

この3要素を含み、若者に関わる多様な取り組みを行っています。京都市内に7か所ある青少年活動センターは、中学生～30 歳までの方の居場所、活動、相談の拠点として京都市から委託を受けて運営しています。京都市ユースサービス協会ではそれ以外にも、子ども・若者ケアラー事業、中学生学習支援事業、社会的養護自立支援事業等を行っており、2019 年には、ユースカウンシル京都（YCK）を設立しました。YCK は、地域に住む若者たちの声を集め、地域の若者をエンパワメントし、地域を変えるための協議体です。京都市ユースサービス協会は、YCK と協働するという立ち位置で、YCK は自分たちでプロジェクトを立ち上げて実施します。

Q 京都市青少年活動センターでは具体的にどのような活動をおこなっていますか？

青少年活動センターは、いわゆる「ユースセンター」で、もともと 1988 年に 1 ヵ所つくられたものでしたが、2001 年に旧京都市青年の家（勤労青少年ホーム）から改編され今の7ヶ所になりました。主に 1960 年代に国の勤労青少年福祉施策を受け、働く若者の余暇施設として京都市が設置したのが始まりでした。余暇施設として、「行かなければならない」場所ではなく、「行ったら面白いことがある」や「ゆっくりできる」場所であって欲しいと思っています。社会の一員としての経験ができる場所でもあると同時に、「何もやらない」ということも選択でき、その選択が保障されている場所です。家や学校、職場以外の場（サードプレイス）であり、何かを評価されるような場所ではありません。ユースセンターは、若者が余暇を過ごす一つの選択肢として、若者が社会の中で生きていくための一助として存在しています。

青少年活動センターでは、「居場所」「活動」「相談」の 3 つを共通の機能とし、各センターにおいて、地域活動、まちづくり、創造表現活動、レクリエーション、若者の居場所づくり、多文化共生等の活動を実施しています。地域ごとの実情に合った活動をそれぞれのセンターごとに展開しています。京都市ユースサービス協会のスタンスは、居場所を提供するのではなく、「若者自身が居場所をつくる」ということを支援するもの。若者自身が機会を持てるようになったり、他の場所でも居場所をつくることができるようになったりして欲しいという願いがあります。

活動の一つである「ロビープログラム」では、フリースペースであるロビーを使って交流の場をつくったり、掲示板を用いた企画をしたり、若者の持ち込み企画を実施したりしています。ロビーでは、一人で過ごしても友だちと過ごしても自由です。活動の前後や自習で利用されることも多く、開かれた場となるようにしています。掲示板を使った企画では、より自由に気持ちを表出しやすく、このような場所、企画の中で出てくる若者の素直な意見や言葉、気持ちを大事にしたいと思っています。また、ロビーに置くものや配置に関しても、若者とのやりとりを大事にしながら決めていきます。

各種事業にはボランティアとして年間約 800 名のボランティアが参加していて、大学生が 7 割以上を占めています。基本的にはボランティアも若者として、対象者に含まれます。青少年活動センターにおける相談は、受付カウンターやロビーでの日常的なやりとりの中で始まります。雑談がきっかけで関係性が育まれ、その延長線上で起こる相談が多くあります。

青少年活動センターは、どんな若者でも利用することができ、普遍的（ユニバーサル）なアプローチと個別課題（ターゲット）に関わるアプローチを両方行っています。場を開いているだけでは手の届きにくい部分には、地域と連携しながら、若者がいる「場」に出向いていくアウトリーチの活動も行います。その一つが「センター機能の持ち出し」です。地域で場所を借りて中高生年代のための場づくりをしたり、キッチンカーでイベントに出向いて場づくりを行ったりしています。青少年活動センターで行っているプログラムは、「学校連携事業」として学校での取組にも繋がっています。

Q 寄付事業としてはどのようなことをされていますか？

市民の方からのご寄付と困っている若者を支えたいという想いを受けて、若者が困ったタイミング、おりおりに触れて帰れる「おりおりのいえ」は、社会的養護経験者や子ども・若者ケアラー等のレスパイト拠点であり、日中利用の「ひなか」、宿泊利用の「よさり」、「ひなプロ」（ひなかに実施するプログラム）があります。緊急支援、自活に繋げる一時的な支援のための給付や貸付、自活に向けた学びの場づくり、理解促進のためのニュースレターの発行等も行っています。

Q 最後に協会として大事にされている思いをお聞かせください

若者との出会い・入口
若者がユースワーカーと出会う多様な幅広い入口がデザインされていること

多様な出会いの機会づくり
若者が多様な価値観、体験、役割、社会と出会える機会があること

若者の声、社会へのアプローチ
若者の声を出せる場づくりとともに、声が正当に扱われるため社会に働きかけること

若者主体
若者の主体を軸に、選択的なやりたいと、内発的な「やりたい」をともに大切にしながら、強要されることなく自己選択・自己決定できること

パートナーとしての若者
若者に関わるとともに、若者とともに協力して取り組む関係性を築いていくこと

社会とのつながり
社会・地域コミュニティの一員として、繋がっている実感を若者が得られていること

若者にやさしい社会づくり
地域理解やファン獲得を通して、若者・ユースワークが大切にされる社会づくりを意識すること

ワーカーのあり方
ユースワーカーとして、若者と関わる余白を持ち、自然体かつ楽しみながら関わるとともに、学び・あり方を問い直す姿勢を持つこと

京都市ユースサービス協会は、「価値を大事にしたい」と考えています。上記の 8 項目をプリンシプル（行動指針）として、これらを前提に活動を続けていきます。

「一人一人」を大切に

萩本　義郎
兵庫県青少年団体連絡協議会 理事
一般社団法人いえしま自然体験協会 副会長

京都市ユースサービス協会が運営する青少年活動センターの第一印象は、青少年の居場所として素晴らしい場所であるということでした。様々な活動がなされている中で丁寧に区分けされ整理ができていることと、職員の方々の数の多さが印象的でした。

青少年活動センターの中で、多くの青少年が各自思うままの活動をしていました。寝転んでいる・漫画を読んでいる・学習をしている・ゲームをしている等の青少年の姿がありました。置いてあるボードには、書初めでしょうか、習字が貼り付けてありました。受付には、食堂から無料の弁当が六人分置いてありました。中学生から 30 歳までの青少年が自由に活動できる場であると感じました。

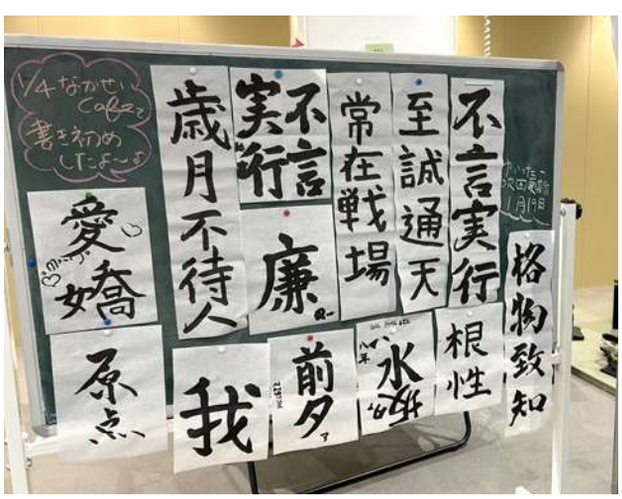
京都市ユースサービス協会の竹久さんのお話を聞きました。竹久さんは、青少年活動センターは「来ても来なくてもいい」「来るといいことがあるかもしれない」「居ることを問われない」「評価をする場所ではない」という場所であること、そして活動の中で「人と人との関係性を大切にしたい」とお話しされました。センターには、相談目的で若者がやってくるわけではなく、受付カウンターやロビーでの日常のやり取りの中で関係性を育んでいき、その延長線上で生まれる相談があるそうです。「きっかけは雑談から」。「受付やロビーでのユースワーカーの関わりが重要である」という竹久さんの言葉が深く心に残りました。「場」「機会」「人」を三要素として、「育ててあげる」ではなく、機会の設定や選択は本人がする「若者の場づくりと多様な機会づくり」が、京都市ユースサービス協会における主な取り組みともお教えていただきました。そして、しっかりとした活動の拠点・足場として市内に7か所の青少年活動センターがあることもわかりました。一人一人の人権を大切にする京都市の方針が、ユースワークという考え方と同一の部分があるように感じました。

兵庫県青少年団体連絡協議会として、私たちは若い指導者の育成に取り組んでいますが、日常の中で子どもの意見を取り入れることが大切である等のユースワークの考え方を取り入れ、それぞれの団体の立ち位置や理念・活動内容を今一度考えていく必要があるように思います。青少年の可能性を信じ寄り添うことは基本的にどの団体も行っていることではありますが、基礎に据える考え方や取り組み方によって、同じ活動をしても大きな違いが出てくるのではないでしょうか。

ボランティアとしてそれぞれの団体で活動している青少年たちは、まさに子どもから大人への移行期にいます。青少年たちに、大人の価値観による「成長」や「自立」、「主体性」を一方的に押し付けず、若者が本来持っている力を全面的に開花しうる環境づくりを目指すことが重要です。

ユースワークという言葉や考え方を、知識としてではなく実践に取り入れることは、なかなか難しいかもしれません。しかし、若者の居場所やボランティア活動の拠点としてすでに成果をあげ、定着している団体から学びを得て、私たちも地域のために更なる発展を目指していきたいと思います。そのような考えが、指導者としての人間性を高め、共に育っていくことができる新しい指導者像になるでしょう。

お話しいただいた竹久さんに感謝します。兵庫県青少年団体のこれからにいろいろな可能性を感じ取ることができた時間でした。ありがとうございました。



ノンフォーマル教育と青少年活動

速水 順一郎 | 兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問

公益財団法人京都市ユースサービス協会は若者を対象に幅広い活動を展開しています。

主に7か所の青少年活動センターの運営（居場所、活動、相談）、若者サポートステーション、子ども・若者総合相談、生活困窮世帯の子どもへの学習支援、社会的養護自立支援などを行っています。

その活動の居場所づくりの理念は「自由でいられる」、「安心できる関係性がある」、「自己・他者を意識できる」、「話せる・きける（対話ができる）」、「場・体験を共有できる」、「情報を得られる・新たな出会いがある」、「やりたいをカタチにできる・チャレンジができる」、「自分で選べる、決められる」、「参画できる余地がある」、「評価されない」。また、居場所を提供するのではなく、若者自身が居場所を作ることが大切だととらえています。

私たち青少年団体活動に照らし合わせてみると、メンバーがこれだけ自由な環境の中で活動に取り組めているでしょうか。子どもを対象とした団体では、子どものニーズにこたえ、子どもの目線にあった活動がなされているでしょうか。もちろんそれぞれの団体の理念をもとにしたうえでのことですが。若者を対象とした団体も同様です。

「ノンフォーマル」という言葉を聞きました。調べてみると、「ノンフォーマル教育」として ACCU（ユネスコ・アジア文化センター）では次のように定義しています。

国内外を問わず、私たちの暮らす社会には、様々な教育施設や学習機会があります。その中でも、学校以外での組織的な学び全般を「ノンフォーマル教育」と呼びます。日本においては、公民館などの社会教育施設を中心に、学習者が主体となって営む学習活動として、またアジアの多くの国においては、識字教室やコミュニティ学習センター（CLC）などにおける基礎教育や生活改善のための学習活動など、ノンフォーマル教育は様々な場所で様々な形態で展開されています。

その目的もまた多様です。不就学の子どもや若者、就学機会を得られぬまま成人となった人たちが読み書き計算の基礎的な技術を習得するためのものから、いわゆる学校教育の枠組みに捉われず、より柔軟な学習形態とスケジュール、カリキュラムでフォーマル教育と同等の学びを保障するイクイバレンシー教育などがあります。また、生活技術向上や職業訓練などを目指したプログラム、歴史や伝統文化の継承を目的とした地域に根差した学習プログラム、地域課題について学び、その解決へ向けて行動するより実践的な学びも各地で行われています。ノンフォーマル教育は、学校教育や学校外教育といった制度的な枠組みを超えて、多様な世代の多様な学びを支える、生涯学習の重要な柱と言えるでしょう。

この中でも、学習者が主体となってと書かれています。すなわちノンフォーマル教育は、子どもや若者が主体となって取り組むものだということです。メンバーに対してこの理念をもって、団体運営や活動の展開を行うことが大切なことだと思います。

また青少年活動センターでは、地域通貨の事業も実施しています。キャシュ時代からカード社会へ、カード社会からスマホ決済社会へと変化しています。家庭でも 子どもがお使いに行く機会が減っています。教育分野では、株をテーマにした授業やフリーマーケットのような商取り引き を体験する機会もつくられていますが、一過性のイベントで 終わっています。子どもや若者が、体験を通じて金銭感覚 が身に着く取り組みの必要性を感じました。ぜひ、青少 年団体で日常的に取り組んでほしいと思います。

「自分らしさ」を大切に

太田 はるよ
兵庫県青少年団体連絡協議会 運営委員
（一般社団法人 兵庫県子ども会連合会 副理事長）

教育の世界に入って 40 年、初めてお会いしたのにも関わらず、大本さんは気さくにお話をしてくださり、こちらの緊張もあっという間にほぐれました。きっとこんな話法も、若者たちにグッと近づく方法の一つなのかもしれないなという第一印象でした。

約2時間のインタビューは、学校教育・社会教育を通しての経験談、現在の学生の実態、彼らを取り巻く環境や課題などの多岐にわたる内容で、大まかに分けると「教師生活の中での若者」「社会教育における子ども・若者」「自分の体験活動」という 3 つの観点からのお話となりました。

高等学校教師時代の経験や、現在勤務されている大学の学生たちとの関わり方、社会教育・生涯学習の観点からのお話をお聴きして、実は今の子どもや若者たちは、さほど昔と変わっておらず、目まぐるしく変化し続けている「失敗体験ができない成長過程」や「正解を求められる教育環境」によって生き方を左右されているではないかと感じました。教育を例に取ると、受験勉強は本来、学力や理解力の試験であるのに、いつの間にか落ちない訓練と技術を学ぶものになっていて、急かされ続けているうちに、ゆっくり自分で考える時間を持てなくなっているのかも知れません。

AI・SNS においても同じようなことが言えると考えます。何かわからないことにぶつかってもすぐに正解がわかるスマホや PC は便利ですが、自分なりに考えて調べて、わかって嬉しいとか学んで楽しいという感情、未知なる力は養えません。大本さん曰く、「大人でも若者でもSNSで繋がったつもり、AI で分かったつもりになっている。リアルはどこに行ってしまったんだろう。」という「～のつもり」ほど、いい加減なものはありません。しかし、これから子どもたちはそんな環境の中で生きていかなければならないし、むしろ上手にツールと付き合う必要があります。ただ、1 月末に厚生労働省が発表した「去年の小中高生の自殺者数が過去最多」を見る限り、この便利なツールも原因の一つかもしれないと思うと残念でなりません。

大本さんがおっしゃる【教科書のない・枠組みにはめない「社会教育」の大切さや、「なりたい自分が見える」「自分の命だから、自分をできるだけ生きて、自分を活かす」「いかに多様な失敗体験をするかが大切」「プロセスを楽しむ」「遊び心を無くさない」「背負うことのない役割分担による活動の継続化や人材発掘」】これらこそが、これからの時代を生きていくためには必要な「教育・共育＝一緒に育つ」なのかもしれません。

これまで国の若年者政策から抜け落ちていたのではないかと思われる世代に向けて、2023 年にやっと子どもや若者たちの声を聴き、若者たち自身が主体性をもって参画し、実践するという「子ども基本法」がスタートし、それを地域団体や青少年団体とともにこれからのまちづくりに活かそうという施策が各自治体でもできつつあります。しかし、ここで大人自身が真剣に向き合わないと若者たちも本気にならないでしょう。今、子どもや若者たちに対する大人の本気度が試されている時だと思います。

これからの青少年団体連絡協議会の役割は、団体同士の繋がりを強化・拡大することや体験活動を推し進めていくことだけでなく、子ども・若者たちの豊かな未来や「自分らしさ」「主体性」の発信ができる環境づくりができるように、各青少年団体が変化を恐れずに常にあり方を考えながら、大人も子どもも一緒に育つ社会づくりを構築していくことなのではないでしょうか。そして、今後も調査・研究だけでなく、実践も継続することが必要だと考えます。

5つの提言

私たち青少年活動団体は、各団体の会員や参加者を増やすため、様々な努力を行なって来ました。しかし、その努力の方向性を見直す必要があるのかもしれません。今回、調査研究を行った「ユースワーク」という活動の視点から、5つのポイントにまとめてみました。

Point 1 青少年をお客様にしない

楽しく手軽に参加できる。このことは参加へのハードルを下げようとするあまり、青少年をお客様にし、結果、主体者になることから遠ざけてしまっていた可能性があります。ユースワークでは「青少年のために」よりも「青少年とともに」が原則と言います。それが子どもや若者の居場所になるということです。私たちの青少年活動が、どこかお客様集めとなってしまっていなかったでしょうか。参加のきっかけがお客様であったとしても、そこから主体者への変化が起こる仕組みや関わり方が必要なのです。

Point 2 活動の成果や自分たちの経験則を押し付けない

青少年活動は社会教育活動のひとつです。私たちは教育という言葉に捉われるがあまり、子どもや若者に「こうなって欲しい」という押し付けが膨らみすぎているのかもしれません。無意識に過剰な評価を行なっていたのかもしれません。私たちの活動はノンフォーマルな教育です。教育的成果を求めた活動ではなく、結果として学びが起きる活動に立ち返る必要があるのです。また、私たち指導者は「私たちはこう育った」という自身の経験則をどうしても伝えたくなります。また。自分が成長に至った経験をさせたくなります。ですが、結果として成長につながるような経験は、あくまで本人の主体的な行動でなくてはいけないことを忘れてはいけません。

Point 3 青少年の要望や想いを声に出す場を大切にする

私たちが関わっているのは、一人ひとり違う人間です。子どもや若者自身が考えるそれぞれの「こうありたい」を引き出すことが重要です。まずは「やってみたい」「こうして欲しい」などの要望の声から青少年の声に耳を傾け、「どうせ話しても変わらない」ではなく、想いを声に出すことがあたりまえになるまで続けていきましょう。声に出した自分が、行動に少しずつ移していくことで、青少年が主体者に成長していくのです。声を出す場をつくり、また声に耳を傾ける指導者のあり方が重要です。

Point 4 学ぶ楽しさ、繋がる楽しさを感じられる場を大切にする

AI やネット環境の発達により、わからないことがあっても検索すれば答えが出て、SNSで簡単に人とすぐに繋ったと感じられる時代がやってきています。前世代のイメージする学びや繋がりとは変わってきています。わからないことがわかる、人と対立しながらも理解し合い深く繋がる。それが学ぶ楽しさ、繋がる楽しさです。結果を求める体験ではなく、過程そのものの楽しさを感じられる場を、私たち指導者は守る必要があるのではと考えます。

Point 5 指導者自身の「こうありたい」を声に

私たち指導者自身が「こうありたい」「こう変えていこう」を一人称で語り、社会を主体的に変えようとして行く姿勢を見せていきましょう。私たちが青少年のロールモデルとなるのです。次世代に期待するのではなく、同じ社会で生きるひとりの個人として、青少年と対等に語ることが、青少年が社会につながることの支援となります。

ひょうご青少年憲章

いま、私たちは暮らしや社会のあり方が大きく移り変わる転換の時代にありますが、
先の阪神・淡路大震災は、人と社会に何が必要なのかを改めて教えてくれました。
私たちは、これまでの自分の生き方を省みて人間生活の基本に立ち返り、
自らを尊ぶと同時に、家庭や地域や国、
そしてかけがえのない地球に生きる人間として、ひょうごの明日を担う青少年とともに、
自信と夢と勇気をもって 21 世紀を築いていくことを誓い、この憲章を定めます。

1 自分を大切にし、自らを律し、行いに責任をもって生きていこう
2 ふれあいを深め、正義感をもち、社会を担う一人として生きていこう
3 人の痛みや喜びを感じあえる心をもって生きていこう
4 多様な人々の存在を受け入れ、ともに支えあって生きていこう
5 自然を愛し、生命を尊び、みえない世界にも襟を正して生きていこう
6 先人に学び、明日に夢をえがき、勇気をもって未来を拓いていこう

「ひょうご青少年憲章」の考え方

自尊・自律

自分を大切にし、自らを律し、行いに責任をもって生きていこう

自ら考え、自ら判断し、自らを律していく自律性は、人間の本質に属します。
そこで人は、おのおの自らを尊重し自信と誇りをもつとともに、権利や自由だけではなしに、それらと不可分に結ぶ義務や責任も果たしていくことが欠かせません。

協力・公正

ふれあいを深め、正義感をもち、社会を担う一人として生きていこう

人間は社会的な存在であり、人々の協力・協働によって暮らしを営んでいます。
人と人とのふれあいを深め、社会の基本的なルールを守り、社会の構成員としての役割を担っていくことが望まれます。

思いやり

人の痛みや喜びを感じあえる心をもって生きていこう

人間関係には、利害にもとづく合理的な関係と、それを越えた心のかよいあいがあり、温かい人間関係を生みだすのは後者です。
そこで、人間的なぬくもりのある社会関係が形成されていくには、どうしても共感や思いやり、あるいは友愛の心が育まれていくのでなければなりません。
そうでなければ、人間関係は合理性のみを追求するものとなり、人間的なぬくもりは消えていくことになるでしょう。

寛容・共生

多様な人々の存在を受け入れ、ともに支えあって生きていこう

社会は、自分と異なる立場にあったり、様々な価値観をもった人々で成り立っています。
社会の急速な変化のなかで、価値観やライフスタイルの多様化が進み、人・モノ・情報などの地球規模での交流も加速しています。
このような状況のなかで、調和ある共生社会を構築するためには、人々が互いの違いを認めあい、尊重しあうことが不可欠です。

畏　敬

自然を愛し、生命を尊び、みえない世界にも襟を正して生きていこう

古来、私たちの先祖は、美しくも厳しい自然を畏敬の念をもって見つめ、その営みに自らの生活をあわせながらひたむきに生きてきました。しかし急速な科学技術の発達や経済の発展の中で人知と人力に対する過信が生じ、自分と自分を取り巻く世界に対する敬虔さといったものが失われ、人・社会・自然の調和は崩されてきました。
私たちは、今一度、人間生活の基本にかえり、自分たちの暮らしや生き方を見直していくことが大切でしょう。

創　造

先人に学び、明日に夢をえがき、勇気をもって未来を拓いていこう

理想や夢を抱き、その実現に向けて努力することは、人間だけに備わった特性であり、人や社会のありようを決定する基礎となります。21 世紀がどのような社会となるか、また、各自の生き方がどのようなものになるかは、私たち一人ひとりが何を理想とし、どう行動していくかにかかっています。
私たち大人が、“こころの豊かさ” を大切にしながら、自信と誇りをもって生活していくとき、子どもたちも温かい思いやりの心や明日をたくましく切り拓く力を身につけて、勇気をもって希望に満ちた未来へ大きく羽ばたいていけるようになることでしょう。

兵庫県青少年団体連絡協議会
https://seidanren.net/

青団連

兵庫県青少年団体連絡協議会 2024年度 加盟団体22団体（順不同）

一般社団法人 兵庫県子ども会連合会	兵庫県商工会青年部連合会
日本ボーイスカウト兵庫連盟	公益財団法人 神戸 YMCA
一般社団法人 ガールスカウト兵庫県連盟	公益財団法人 神戸 YWCA
一般財団法人OAA(野外活動協会)	兵庫県青年洋上大学同窓会
兵庫県BBS連盟	一般財団法人 兵庫県少林寺拳法連盟
兵庫県ユースホステル協会	兵庫県緑の少年団連盟
一般社団法人神戸青年会議所	兵庫県モラロジー青少年団体連絡協議会
公益社団法人日本青年会議所近畿地区 兵庫ブロック協議会	兵庫県世界青年友の会
兵庫県スポーツ少年団	一般社団法人 神戸国際支縁機構
兵庫県青年国際交流機構 (IYEO)	NPO法人 生涯学習サポート兵庫
一般社団法人 いえしま自然体験協会	NPO法人 ブレーンヒューマニティー

兵庫県青少年団体連絡協議会 調査研究委員会

委 員 長	山崎　清治（生涯学習サポート兵庫 理事長）
委　　員	速水順一郎（兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問）
委　　員	萩本　義郎（いえしま自然体験協会 副会長）
委　　員	太田 はるよ（兵庫県子ども会連合会 副理事長）
編集委員	高田　　愛（生涯学習サポート兵庫 姫路事業部GM）
編集委員	瀧川　桃香